

dictionary no.114

「言葉を失った dictionary」PDF版を ご覧のみなさまへ

ご覧のPDFはフリーペーパー『dictionary』no.114、2月10日に発行されたものです。今号は創刊19年目にして初の試み、言葉（文章）の一切ないdictionaryをお届けします。演劇、広告、音楽、雑誌、新聞、グラフィック、写真...さまざまな分野で今、何が表現できているのか、規制はあるのか、それともないのか。あるとすれば、その実体は？誌面には、ポートレートのみで登場する、各分野の一线で活躍するみなさんによる全9対談。対談映像、テキストPDFは、web、ポッドキャストにて順次公開いたします。

対談出演一覧

坂本龍一（音楽家）、茂木健一郎（脳科学者）、ヒロ杉山（アーティスト）、箭内道彦（クリエイティブディレクター）、是枝裕和（映画監督）、小林顕作（俳優）、岡田利規（演出家・劇作歌）、Jonathan Barnbrook（グラフィックデザイナー）、米田知子（フォトグラファー）、南島信也（朝日新聞）、中島みゆき（毎日新聞）、須田泰成（コメディライター）、高崎卓馬（広告プランナー）、森山裕之（Quick Japan 編集長）、ECD（ラッパー）、志人（ラッパー）、陣野俊史（音楽評論家）、桑原茂一

Podcast media CLUBKING について

Podcast CLUBKING では多彩なコンテンツを配信しています。

音声作品 映像作品 音楽作品

それぞれ異なった下記のコンテンツメニューよりお好きなものをお選びください。

media CLUBKING へのアクセス方法

iTunes Music Store Podcast Castella <http://www.castella.jp>

ケロログ <http://www.voiceblog.jp>

また下記のURLで直接アクセスも可能です

<http://phobos.apple.com/WebObjects/MZStore.woa/wa/viewArtist?id=191784134>

配信コンテンツ

スケジュールの詳細は Podcast media CLUBKING と WEB にて番組表を公表します。

Podcast

<http://phobos.apple.com/WebObjects/MZStore.woa/wa/viewArtist?id=191784134>

WEB

<http://www.clubking.com/>

インタビュー配信予定リスト

2月第3週

瀧本幹也（写真家）六ヶ所レポート再配信

2月第4週

箭内道彦（クリエイティブディレクター）×是枝裕和（映画監督）

2月第5週～3月第1週

志人（ラッパー）×陣野俊史（音楽評論家）

2月第2週

ECD（ラッパー）×陣野俊史（音楽評論家）

3月第3週

小林顕作（俳優）×岡田利規（演出家・劇作歌）

3月第4週

須田泰成（コメディライター）×高崎卓馬（広告プランナー）×森山裕之（Quick Japan 編集長）

3月第5週

南島信也（朝日新聞）×中島みゆき（毎日新聞）

対談 今、表現者たちは何を視ているのか？

ディクショナリーという方法。

アナキストの 増える国で

ラッパーのECDに会うのは、何回目だろうか。ライブで観る以外に、数回、インタビューや対談で顔を合わせているのだけれど、会うたびに彼がジッと眼を凝らして世の中を眺め、一人で考えている事実が伝わってくる。90年代にはシーンの中心人物として活動していた彼は、それからの約十年を、自分の言いたいことを言うために、あるいはやりたいことをやるために費やしてきた。そんな感じがある。余分な贅肉を落とした言葉の力は、ラップ以外の言葉からも滲み出ていた。(インタビュー・構成 陣野俊史)

言いたいことが言える場所

陣野 最近の活動から遡ろうと思うんですが。テーマ的なところで言うと、「言いたいことはちゃんと言えてるの」ということなんですが。

ECD ああ、そういうことでいえば、僕は言いたいことが言えないところはさっさとオサラバして、ちゃんとモノが言える場を作っていこうというか、モノが言える場っていうよりも、好きなことができる場所。一時的なところでもいいから。空間とか、そっちのほうが面白いですね。言いたいことが言えないのは、競争原理に支配されたTVの世界とか、メジャーなレコード会社の世界とか、そういうところでは本当に何も言えなくなってきたな、と感じたことが十年くらい前にあったので、もう、そのことで闘うよりは、そうじゃない場所を作ろうと。

陣野 移動する、と。

ECD 移動はしないですね。立てこもってそういう場所を作るのが、わりと最近の、自分の立場で、それははっきりしているんじゃないかな。言葉でいうと「オ

ルタナティヴ」ということだと思います。

陣野 僕はそういう場所に立てこもっているECDさんに最初に会ったので、そういう人なんだとずっと認知しているんですが。

ECD はい（笑）。

陣野：このアルバム『CRYSTALVOYAGER』（1）では言いたいことが言えているな、と思いました。

ECD 自分の責任でやるぶんにおいては、言いたいことも言えるとは思いますが、ただ、それも根本的に肯定していいのか、というと、いろいろ考えるところがあって。だから、たとえば、表現者は何か言わなければいけないのか、とさえ思うし。もし、そういうことが要請されているとすれば。いまどき、政治家でさえ自分の言葉で話すということが要請されてもてはやされているわけじゃないですか。そういうときに、しかも一般の人までがブログで自分の言いたいことを発信している気になれる、そういう状況の中で、言いたいことを言うというよりも、やりたいことをやることのほうがたぶん難しいし、実際にやろうとすると規制もされるし。言うことだけならば、とくに匿名であれば、自分が自分であることを放棄すれば、何でも言えることになってて、仮にも「表現者」と名乗っている人たちが、何を言うのか、言わないのかが、重要じゃないかなと思う。黙ってやりたいことだけをやるということが重要じゃないかな、とっていて、ラッパーですけど、いま、言葉で伝えることが重要じゃない、というか、それこそパーティーを盛り上げるために言葉で煽ることはあっても。音楽として言葉を発することは嬉しいんですけど、自己表現とかじゃない、とっていて。「自己表現」。自己を表現しなくちゃいけないという風潮はどうかと思うし、そういうことにカネを使わされてって感じも嫌だし。

中原昌也が書きたくない書きたくないって言って、小説を書いている感じも、たぶん、本人も意識してないかもしれないけれど、そういうことに対するアンチテーゼという部分はあると思う。なんでなんですかね。普通の人までがモノを言わなきゃいけないことになっているのか。じつはそれは不幸なことなんじゃないか、

って思うんですよね。

モノを言うことの価値そのものが低下している

陣野 以前、BBS をやってらっしゃいましたよね。

ECD 二年くらいやってました。

陣野 そのときの感じといまの感じは違いますか。

ECD ネットの世界とかですか。でも、いま2チャンネルに書き込んでいる人って、案外少数の人じゃないかなとは思ってて、しかももう飽き始めている感じはしますけれど。

モノを言うってことが凄く薄まっているじゃないですか。それこそ匿名ならば誰でも、すごい過激なことも言えちゃうということになっていて。でも、ネットの中の発言は全部管理されている。出所も辿っていけばわかるし。そういう意味では、完璧に管理された中で好きなことを言っているということを知ってやっているのかどうか、わからないですけど。そんな中、記名で原稿を書いている人までが相対的に薄くなっているような気がする。

陣野 ネットで連載している文章が紙媒体になることも多いじゃないですか。最近。でも、最初にネットに書いてたなというのは、その本を読めばわかりますよね。妙にフラットな感じがあるんですよ。薄まっている感じはたしかにありますね。

ECD 伝える気もないのに、伝わることに対してすごく楽観的な気がするじゃないですか。……ネットの中の特殊な言葉づかいてあるじゃないですか、僕はあれが嫌いで、笑うをWで、とか。それで伝わって当たり前って、感じがして、モノを伝えようという感じがなく、気がする。伝わってないのはわかんないほうがおかしいくらいの、偉そうな感じがすごくしてて。

ECD 別に誰かの陰謀だとかそういうのではないと思うんですが、モノを言うことの価値そのものが低下している。

陣野 インフレを起こしている？

ECD そうですね。どんなことを言ったって、というところ。

陣野 あと、意外とスルーするでしょ。

ECD そうですね。

陣野 たとえば僕の関わっている業界で言うと、ある人が書いた小説が剽窃でできているという、ある種、告発文めいた文章が文芸誌に載ったんですが (2)、みんなスルーしてますもんね。

ECD だから真偽に誰も頓着していないというところがある。

アナキスト人類学

陣野 少し話を戻して、デヴィッド・グレーバー (3) の話をしましょうか。

ECD 少し長いですがけれど、引用します。「アナキスト、オートノミスト、シチュアシニスト、そしてその他の新しいタイプの革命家たちの間では、世界を苦痛の名においてしか見ようとしなない古いタイプの冷酷、非情、自己犠牲的革命家たちは、結局、さらなる苦痛を生産するだけであるということが、通念となってきた。確かにそれは過去起こりがちな傾向だった。だからこそ、今日強調されるのは、快楽や祝祭やそこではすでにわれわれが自由であるかのように生きることができる「一時的自律圏」を創造する方向である。しばしば気違いじみた音楽や巨大な張りぼて人形が現れる「祝祭的抵抗」は、「資本主義的精神」に満ちたピューリタン開拓者たちが、あくまでも嫌悪し破壊するまでに至った中世後期の枝編み細工の巨人や竜、またはメイポールやモリスダンスへの意識的な回帰なのである」。僕はこれを読んで、自分がやってきたこと、やりたかったことはつねにこれだな、と思いました。音楽でこういうことができるんじゃないかと思うし、サウンド・デモ (4) に参加したことで余計に思うようになりました。道の真ん中で踊るということで、一時的であれ、自由を自分で体現して、ああ、これじゃんと思う感じがあって、それで戦争は止められなくても、そこで、その場だ

けでも「ダンシング・イン・ザ・ストリート」って曲が昔ありましたけれど、そういうことを、できることをやっていきたい、と。で、それで、ちょっと続きがありまして、「資本主義の歴史は、集合的／祝祭的消費への攻撃から、きわめて個人的、私有的、あるいはこそ泥的な形式の伝播へと移行してきたが、パーティに集う代わりに、彼らのすべての時間を生産に捧げるようになったために、それらをどのように売るか考案せねばならなくなったのだ」。つまり、幻始社会にまで行かなくても、たくさん収穫のあった年にはみんなでお祭りをして、みんな消費する、と。ところが、個人が消費しなくてはならなくなって……。

陣野 サウンド・デモ自体は、もう二年前？

ECD 三年前ですね。

陣野 僕も一度だけ参加しました。道の真ん中を歩いて楽しいですよ。

ECD 僕はもうそれだけでよかったですね。

陣野 あと、グレーバーが言っているのは「欲望の私有化」ということですよ。

ECD ええ、モノを買わなくちゃならなくなって、それよりはパーティのほうがいいだろうということが書いてある。サウンド・デモからロー・ライフみたいな運動へは確実に繋がっているし……。みんな、それほど論理的には考えていないけれど、パーティということで、資本主義に対抗していると。

陣野 そんな場があることによって。

ECD そう、そう。週末一晩でも、みんなで騒いでカネを使うということは、それでだんだん仕事する量が減ったりすることはすごくいいことだろう。そういうパーティをつかさどるMCとかラッパーだったら、音楽に携わっていることは、結構いいことだな、と最近思っていて、なるべく、そういう場にいたい、という感じですよ。

陣野 「欲望の私的私有化」を解放するわけですよ。デヴィッド・グレーバーの『アナキスト人類学のための断章』という本です。なんか、本の宣伝みたいですが（笑）。

人がただ集まること

ECD 僕のまわりで親しい人達は、35歳を過ぎて、スケートボードをやって、ワンコール・ワーカーのような人たちです。肉体労働中心の。いまの若者の、最下層の仕事をしながら、それでバンド活動をやっていて、それで、バンドのライブは週1から2くらいのペースでやっていて、最近すごいなと思うのは、昔だったら、自分でノルマを払ってということではなければライブハウスで演奏できなかったじゃないですか？ 借りられなかった。いまはそういう連中を呼んでくれるイベントが結構あって、ちょっとのギャラしかでないけれど、自分でカネを出さなくても、とりあえず自腹は切らなくても毎週ライブができるという状況がある。それが面白い。面白いというか、そうでなければ、35歳になって、ハードコアなパンクとかやってられないと思うんですが。

陣野 状況は「好転」しているんですかね？

ECD 好転、というか、本人たちがそもそもオーヴァー・グラウンドに行くことを考えていないので、上昇志向がないから。昔だったら、僕もそうだったんだけど、ある程度売りたいとか絶対思ったじゃないですか。音楽を始めて、ちょっとはね、と。そういうのが最初からないタイプの人たちが出てきていて。ヒップホップをやっている人はまだ上昇志向が残っている。いまの一部の、クラスト(5))とか、あのへんのパンクの人たちは、普通の競争社会から明らかに意識的に降りている。だからといって、もの凄く貧乏な暮らしをしているわけじゃなくて、ちゃんと仕事もするから。

ECD 思想家の小泉義之さんが去年出した本(6)の中で、経済はもっと低いところで循環していけばいいんだ、ということを書いていて、たしかにその通りだな、と。低いところで小さく回っていけばいいわけで、だから日本がダメになっていくのはいいことだって書いているんですけど、僕もそう思うし、そういうときに生き残るのは、今言ったような連中じゃないかな。

陣野 暮らしていけてるわけでしょ？

ECD そうですね。

陣野 言う前にやってるわけだし。

ECD 全国のライブハウスから呼ばれて、週1と2とかライブをやるわけですが、その需要の量は結構信頼していいんじゃないかな、と思います。ほとんど雑誌とかメディアで紹介されないようなバンドでもそういうことになっていて。しかもヘタすると海外まで行きますからね。同じようなネットワークの中で呼ばれて。

陣野 そのネットワークのフラットな感じはいいですよ。

ECD そうなんです。だから、何を求めるかで、違うんでしょうけれど。

陣野 前にECDさんに会ったときは、僕はちょうど渋さ知らズの取材をしているときだったんですけど、渋さのメンバーもほぼ毎日、いろんなところでライブをやっている。大きなオーケストラの編成では月1とか2とかなんだけど、全員がほぼ毎日別々にライブをやっているんです。

ECD 僕が「文藝」で『渋さ知らズ』の書評を書いたときに思ったのは、渋さ知らズってメンバーが集まってくることに意味があって、あの本の中でもメンバーに召集をかけるじゃないですか。で、集まってライブがあって……。僕も一度だけタイバンだったことあって、終わった後、メンバーに手配師のようにお金を渡している感じとか、客も、やっぱり渋さがあると集まってくる。いま、集まることの意味が大事だと思うし。

陣野 何はなくても、そこに行くのが楽しいことがありそう、という匂いとか。

ECD そう。やっぱり、そういうものがいま規制されようとしているな、とは思いますが。敏感なんじゃないかな、権力側も。あながちわかってなくもない。去年の春のサウンド・デモでDJが逮捕されたりするのも、結構わかってきちゃってるからかな、とは思いますが。だからうまくわかんないような方法を……。

陣野 あのときは機材を持っていったんでしょ？

ECD そう、ターンテーブルを持っていったそうです。

陣野 目的があって人が集まっていると、たいしたことないんだけど、何か愉

しいことがありそうだとということで人が集まっていると、これぐらい怖いことはない。

ECD 渋谷の109の、地下の、地下鉄に行くコンコースってわりと広がっているんですよ。あそこでたまに、センター街にいるギャルとかギャル男たちが50人くらいで輪になって座っていることがあって、それは不穏ですよ（笑）。何を相談しているのか、わからないんですけどね。

陣野 特に愉しそうにも見えない？

ECD いや、愉しそうですけどね（笑）。

アナキストが増える

ECD 長年ラップやってると、やってる最中に客が動いているか動いていないかが、気になるんですよ。人のライブ観ててもそうなんですけど、ラップのヒラウタというか、サビじゃないところをラップしているときって、客が止まっていることが多くて、それが嫌でした。だからちゃんと踊ってくれる歌詞を作りたいなと思って、最近、ちょこちょこっという感じに近づいてきている。それは情報量の問題でもあると思うんですよ。情報量が多すぎるんですよ、ラップって。ちゃんと聴こうとすると身体が止まっちゃうし、動きながらちゃんと頭に入ってくる量のコトバ、質のコトバというのがあるんじゃないかな、ということの思い始めていて、それがどういうものかということも、ちょっとずつ掴めてきてはいますね。あからさまにパーティ・ラップだからパーティの場で伝わるかっていうと、そういうことでもなく。

陣野 「神経衰弱」という曲と、あと少し他の曲もそうなんだけれど、音節を区切ってラップすることを意図的にやってらっしゃる印象を受けました。

ECD 一語一語置いていく感じとか。ああ、それはありますね。

陣野 これは今の話に繋げて言うと、情報量を少なくしていくということでしょうか。

ECD 結局、韻を踏むというのは、情報量を少なくしていると思うんですよ。韻を踏むということは同じ音が連なるわけで、音としては同じものが繋がっているわけだから、踏まない歌詞よりは踏んでる歌詞のほうが情報量が少ない。韻を踏むことの意味はそこにあるんじゃないか、と（笑）。だから、結構、ラップしてて、前にどんな人がいてというのが見えてから書いているところはありますね。そういうふうにしかなって書けなくなっている。想像がつく相手に向けて書いているわけです。

僕は、結構、周りの人に影響されていますね。評価の厳しい人、とりあえずそいつをウンと言わせなければ、まあ、製作が進行しないということもありますが（笑）、一番いい聞き手で、ジャケットをデザインしてくれるヤツとか、ミキシングしてくれるヤツとか、そいつらのOKが出ないことにはとりあえず前に進めない。

陣野 あとは、ライブでCDを焼いたものを売っていらっやいますよね。その場の数というか、300とか400とか。そういう数も基本にはある。もちろん流通に出ているものもあるけれど、ライブ会場で「手売り」するものもある。その枚数。ライブを聴いて買ってくれる人がいる。その緊密な共同体というか……。

ECD まあ、そうですね。だから、初めて観てくれる人でも、ライブ観てから買ってくれる人の手ごたえはあります。

陣野 そこの数百枚というのは、想定範囲ですよ。それを超えた大きな数は、流通の話になるので。

ECD 自分の想定した範囲に限定して書いていくと、逆に外の世界からみれば、なんだ、それって感じにどんどんなっていく。その、一般の人には（ヘンな言い方だけど）、アンチテーゼにはなっていく、といま一瞬思いましたけれど。そういう世界って、閉鎖的だと批判されるわけですけど、閉鎖的になって、外から見ると足を踏み込めないぞという世界にしないと、逆にそこからしか拡がることはないんじゃないかな、と。

僕が昔ヒップホップに惹かれたのも、とても今のニューヨークからは想像できないような人たちがパーティをやっていた。ドンドゴドンドコ。音楽をやっている

という情報だけが頭に入ってきて、一番最初に聴いたラップも、足を踏み入れちゃいけないところという感じはあった。小さいころ、それこそ封鎖している東大に行ってみたいと思ったし、ヘタに開放された空間とかではなくて、誰でもいけるロックフェスに何か面白いものがあるのかっていったら……。やっぱりないんじゃないかな、と。いま、少なくともはなってきましたね。足を踏み入れるのが怖いって場所は。

陣野 でも、この間、大学生と話していて、僕らが普通に入っているジャズのハコとかも、あそこはヤバいんじゃないですか、とか言われたりする。(9)

ECD 年にとって僕らが鈍くなっただけなのかも(笑)。ロー・ライフのときに、ボランティアで働きに来ていた高校生くらいの学生が、やっぱりショックを受けてましたから。この人達はふだんどんな暮らしをしているんだろう、ってブログで書いていた人がいて、ああ、よかった、よかったって(笑)。

いま、確実に階級化が進んでいて、間違いなく低所得者層が踊るためのパーティがある。中野あたりのクラブで、踊る。そんなところでクラブカルチャーとパンクがごちゃごちゃになっていたりしている。

ECD これだけ右傾化、右傾化と言われているけれど、健康保険料や年金の未納者が増えているということは、誰も国家のことなんか信用していない、ということなんじゃないかな。じつはそのことにいちばん危機感を感じているのは政治家で、だからこそ「美しい国」とか言い出すし。僕が物心ついてから、政治家がこれほど、国家の美しさを言った時代はなかったと思うんです。それは危機感の現われで……。

陣野 じゃ、アナーキストは増えているんですね。

ECD 本人も知らないうちに(笑)。というか、ジョン・レノンの「イマジ」に「国なんかないと想像してごらん」というのがあるじゃないですか、でもいまや国なんかないという振る舞いをしている人がいる。想像するどころか。実際にもう国なんかないというふうに振る舞っている人がいる。僕もそうしたいし。

陣野 ……というような感じで。「アナーキストが増える2007年」と(笑)。曲

も紹介しておきましょう。

ECD じゃ、今の話の続きで。「LAND OF THE DEAD」(10)を。

何度確かめても

何度確かめても

何度確かめても

何度確かめても残高ゼロ

ザンダカゼロ ザンダカゼロ

それでも生きてる LIVING DEAD

となりの部屋の ZOMBIE IS ME

ZOMBIE IS ME ZOMBIE IS ME

ヒズミとヒズミ スキマで不死身

電波悪いところでも平気

電子音で塗り潰せ冬景色

寝耳に水を注ぎ込め

くじ引き当たらないのが運命

死ににくいからだ仕方がねー

聞きにくるなら今のうちに

次にする？ さよなら期限切れ

何度確かめても

何度確かめても

何度確かめても

ザンダカゼロ ザンダカゼロ

それでも生きてる LIVING DEAD

となりの部屋の ZOMBIE IS ME

ZOMBIE IS ME ZOMBIE IS ME

沈みゆく街 仕事無い不景気
 ネズミが逃げ出しても平気
 検温しても体温は零度
 動きたくない冬場なら冷凍
 リクルート無用生きる屍
 狂うとしたら生きてるからだ
 売ろうとしたら死んでた ダメだ
 どっちにしろ LAND OF THE DEAD

何度確かめても
 何度確かめても
 何度確かめても
 ザンダカゼロ ザンダカゼロ
 それでも生きてる LIVING DEAD
 となりの部屋の ZOMBIE IS ME
 ZOMBIE IS ME ZOMBIE IS ME

もがく一声かきたてられる
 まるで黒板爪立てられる
 そんな音がしてホコリ巻き上がる
 持ち上げられてカラダが浮き上がる
 渦巻くルツボに飲み込まれる
 FROM 地下街あふれて湧き出る
 商店街ウィンドウにへばりつけ
 疲れ知らない ZOMBIE の群れ

何度確かめても

何度確かめても

何度確かめても

ザンダカゼロ ザンダカゼロ

それでも生きてる LIVING DEAD

となりの部屋の ZOMBIE IS ME

ZOMBIE IS ME ZOMBIE IS ME

注釈

(1) 2006年にリリースされたECD名義の最新作。「神経衰弱」や「LAND OF THE DEAD」など、彼の立ち位置がリアルにわかる名曲ぞろい。

(2) たとえば、「文學界」2005年11月号、片岡直子「インスピレーションの範囲 小池昌代さんの『創作』をめぐって」と題された文章では、小池昌代氏の小説や詩にいかにも他人の書いたものの強い影響（はっきり「剽窃」とは言っていない）が認められるかを、連綿と指弾している。この長い文章が目立った反論もないまま放置されていることは、ただただ驚くのみ。

(3) 文化人類学者、活動家。2006年に初の日本語訳書『アナーキスト人類学のための断章』（以文社）が刊行された。

(4) 2001年の、アメリカによる対イラク戦争への反対を契機に盛り上がった一連のデモを指す。複数のトラックに音響セットを持ち込んで、渋谷の宮下公園を皮切りに青山をめぐってふたたび渋谷へ戻ってくるコースを、DJサウンドとともにデモ行進した。

(5) クラスト・コアの略。ハードコアから派生した音楽のジャンルのひとつ。歌詞は政治的なものがほとんど。

(6) 小泉義之『「負け組」の哲学』（人文書院、2006年）。

(7) 言わずと知れた、日本を代表するジャズのビッグ・バンドのひとつ。ダンドリスト不破大輔を中心に練達のミュージシャンが集う。

(8) 陣野俊史『渋さ知らズ』(河出書房新社、2005年)

(9) たとえば、江古田にあるバディのような「開かれた」ジャズの空間でも、いわく言いがたい近寄りがたさの匂いを発しているらしい……。

1978年生れの音楽批評家。著書に『ヒーローはいつだって君をがっかりさせる』(太田出版、2004年)がある。

(10) 『CRYSTALVOYAGER』収録の曲。

プロフィール

ECD

1960年東京生まれ。ラッパー。

陣野俊史

1961年生まれ。音楽とサッカーと現代文学を守備範囲とする批評家。著書に『フランス暴動 移民法とラップフランス』『じゃがたら』、訳書に『フーリガンの社会学』など。